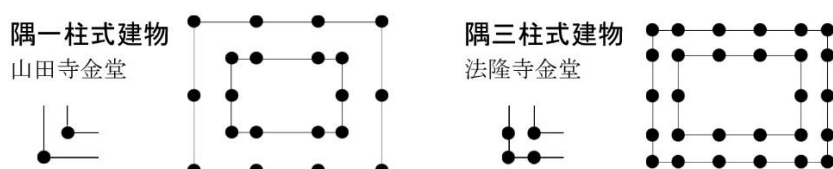


博士論文（要約）

日中古代隅一柱式建物の研究

唐 聡

本研究では、山田寺金堂（643、奈良）をはじめとする4例の日本古代金堂遺跡に確認される隅部の特異な柱配置を「隅一柱式」柱配置と呼び、このような柱配置をもつ建物を「隅一柱式建物」と定義した。それに対して、法隆寺金堂のように、桁行、梁行及び斜めの三つの方向にそれぞれ柱が配置されたものは「隅三柱式」建物と呼ぶこととする。



（自筆）

本論では、日本に実在した4例と同じく大陸建築技術が背景にあるものとして、7-11世紀の中国敦煌石窟壁画を中心に確認された54点の隅一柱式建物を描いた画像資料に基づき、古代隅一柱式建物の研究を展開する。

論文は三つの部からなる。第一部（第1章）は、日中韓における隅一柱配置をもつ建物の現存例をまとめ、平面規模と上部構造に注目して分析した。その結果、まず上部構造により隅一柱配置の建物は裳階型と庇型に分けられることが分かった。庇型は数が僅かであり、平面規模が母屋一間と三間のものに限ることに対して、裳階型は数多く現存しており、母屋五間のものまで確認された。

第二部（第2～5章）は、敦煌壁画において、初唐から曹氏帰義軍時代まで（619-1036年）の49点の隅一柱式建物建築図が確認された。そこに描かれた建物の類型により、塔の隅一柱式建物建築図、城門楼の隅一柱式建物建築図、楼阁・仏殿の隅一柱式建物建築図の三種類に分けられる。この三種類の隅一柱式建物建築図を類型ごとに絵画特徴を考察した。同時期の隅三柱式建物建築図と比べて、隅一柱式建物建築図としての描法上の特徴を明らかにした。さらに、隅一柱式建物建築図の描法も時代の流れとともに変化したことを明らかにした。

第三部（第6～7章）は、第二部で取り上げた楼阁・仏殿類の隅一柱式建物建築図に基づき、そこに描かれた古代隅一柱式建物の建築的特徴をそれぞれ考察した。まず平面規模と空間特徴については、全ての絵図に描かれた隅一柱式建物は平面規模が母屋三間以下の小規模建築に限られ、閉鎖的な母屋に吹放しの四面庇がつくことが共通する特徴として認められる。次に軸部構造、特に組物については初唐期と吐蕃-曹氏期に分けてそれぞれの特徴が見られる。

結章では第二、第三部で考察した隅一柱式建物建築図の特徴を、第一部で考察した現

存例の特徴と比較した。まず成立時代について、建築図が全て古代のものであることに対して、現存例がほぼ中世以降のものである。次に構造について、建築図に描かれた隅一柱式建物は庇型が主流であることに対して、現存例には裳階型が圧倒的多数を占める。それにより、古代隅一柱式建物の構造上の特徴は、現存例が多い裳階型とは違い、庇型であることにありと考えられる。最後に、敦煌壁画に描かれた古代隅一柱式建物の構造上の特徴を参考とし、日本の古代隅一柱式金堂遺跡である山田寺金堂と夏見廃寺金堂の上部構造の可能性を議論した。